

## 1. 人型ロボットが人間の世界記録を大幅更新 北京でハーフマラソン

朝日新聞 2026年4月19日 8時32分 (2026年4月19日 11時07分更新)

動画：[人型ロボットが人間の世界記録を大幅更新 北京でハーフマラソン](#)：朝日新聞

動画：【昨年の大会】[人型ロボのハーフマラソン、北京で「世界初」大会](#) 動画：朝日新聞

(参考1) [日本初の人型ロボット展示会 中国企業が席卷](#)

(参考2) [日本【国内初の実証実験】空港の地上支援作業に人型ロボット](#)

## 2. 北京ロボットハーフマラソン—表彰台を独占した Honor 社の野望

[北京ロボットハーフマラソン—表彰台を独占した Honor 社の野望](#) By 土江錠

2026年4月19日、中国・北京の経済技術開発区、E-town で開催された第2回ロボットハーフマラソンで、中国のスマホメーカー Honor (オナー) の「閃電 (Lightning)」が **50分26秒** を記録。人間の世界記録を約7分上回り、1位から3位までをすべて閃電が独占する結果となった。優勝タイムは昨年の3分の1。

### ① Honor(オナー社) 低価格スマホブランドから AI 企業へ

Honor (オナー社) はもともと Huawei の低価格ブランドとして、2013年に誕生しました。

独立後、プレミアムスマホと折りたたみ端末に軸足を移して、急速にポジションを確立。2025年に5年間で100億ドルをAIに投資すると発表し、「スマホメーカー」から「AI企業」への転換を宣言。

### ② 「Alpha Plan」は「スマホ」「マーケットプレイス」「研究所」の3本柱

第1の柱「Alpha Phone」は、AI統合型の次世代スマートフォン。MWC 2026ではアーム付き「Robot Phone」のコンセプトモデルが公開されました。200メガピクセルカメラを搭載したジンバル式アームがスマホから伸びる—[スマホそのものをロボット化する、挑戦的な設計です。](#)



ハーフマラソンのコースを駆け抜ける Honor のロボット © i4U

### ③ 熱、自律、耐久—「3つの壁」を超える

第1の壁は「熱」。モーターの連続駆動は大量の熱を生みます。閃電は自社開発の[液冷システム](#)を搭載し、ハイエンドPCのような冷却機構を脚部に組み込むことで、長時間の高出力走行を可能にしました。

第2の壁は「自律性」。大会参加ロボットのうち、自律走行は約40%で、残りは遠隔操縦でした。

第3の壁は「耐久性」。21kmという距離を、一度も止まらず、バランスを崩さず、一定のペースを維持し続けること。閃電は走行中のエネルギー切れを回避するバッテリーシステムを取り入れています。

[同社が掲げるロボットの3つの用途、「ショッピング支援」「職場巡回」「介護向けコンパニオン」](#)はいずれも、「人との自然なやりとり」が鍵を握る領域。これはスマホ企業としての強みが直接生きる舞台で

もあります。

#### ④ 100 社超がひしめく「戦国時代」

中国では 100 社超のヒューマノイドロボット企業がひしめいています。

Unitree のロボットの平均単価は、2023 年の約 59 万元から 2025 年には約 17 万元へと急落。2025 年に 5500 台以上のヒューマノイドを出荷し、売上高 17.1 億元（約 2.5 億ドル）、前年比 335%増を達成しました。

UBTECH（優必選）は 2023 年 12 月に香港証券取引所に上場し、ヒューマノイドロボット企業として世界初の IPO を果たしました。AgiBot（智元機器人）も 2025 年に 5100 台を超えるロボットを出荷。世界シェア約 39%を占める業界トップに立っています。

### 3. 中国のヒト型ロボットには政府の支援が詰まっている

C・ナイ氏 ジェームズタウン財団研究員 2026 年 5 月 9 日



① 今年の春節イベントで、中国の宇樹科技(ユニツリー・ロボティクス)のヒューマノイド（ヒト型ロボット）が武術の演武を披露した。若い技術者によるスタートアップの「フィジカル AI（人工知能）」分野での活躍は、中国が世界にアピールしたい成功物語そのものに見えた。

② 中国政府は数十社の損失を吸収してでも、少数の世界的覇者を生み出そうとしている。電気自動車(EV)で多くの企業が淘汰されながらも、比亞迪 (BYD) や寧徳時代新能源科技 (CATL) が台頭したのと同じ論理だ。

中国では地方政府が独自の支援を主導しているのが特徴的だ。上海のアプローチは、国内資金に「グローバルサウス」の政府系マネーを組み合わせているのが特徴だ。たとえばサウジアラムコのベンチャー投資部門が上海の企業に出資している。

③ 中国が国家ぐるみで育てたスタートアップと、日本や欧州の企業は対峙するのである。政府が関税や輸出規制といった政策手段で対抗するのは困難だ。いずれの措置も、企業を生み出す制度インフラそのものには届かない。世界の注目を集める 中国のロボットの背後には、巨大な育成システムがある。重要なのは機械ではなく、それを作り出した装置の方である。 関連英文は Nikkei Asia サイト (<https://asia.nikkei.com/opinion>)。